

ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオとその礼拝堂装飾

The Sacro Monte Calvario of Domodossola and the Decoration of its Chapels

関根 浩子

Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：ドモドッソラ、サクロ・モンテ、カルヴァリオ、芸術家、礼拝堂装飾

Keywords: Domodossola, Sacro Monte, Calvario, Artists, Chapels Decoration

Summary

The Sacro Monte Calvary of Domodossola, one of the constituent assets of the world heritage “Sacri Monti of Piedmont and Lombardy”, was started in the second half of 17th century against the background of the dissemination of the “Via Crucis” devotion in the 17th century.

The study of this Sacro Monte continues to be based on Tullio Bertamini’s 1980 dissertation, compared to the accumulation of studies of other major Sacri Monti. The fact is that the texts of the few books and articles published after that are either in charge of him or rely heavily on his achievements when written by others. In Japan, as far as I can tell, there is no discussion that outlines the process of its formation and the decoration of the chapel. Therefore, in this paper, although the reference to ancient documents is insufficient, as part of the overall understanding of the movement of artists between Sacri Monti and the actual situation of collaborative production promoted by the artists, based on the results of previous research, I tried to grasp the whole picture of this Sacro Monte, especially the painters and sculptors involved in the chapels decoration. At that time, by creating two tables on the artists involved in the construction and completion of each chapel, their activities, and their birthplaces, it was made easier to visually understand the transition and characteristics.

As for the development, in Chapter 1 first we described the process leading up to the start of construction of Domodossola’s Sacro Monte, and then in Chapter 2, the artists engaged in construction and decoration were specified as much as possible while following the current pilgrimage route, and making transition tables (Tables 1 and 2) with information, we clarified whether or not a breakthrough is possible in about 300 years until completion. Then, in Chapter 3, we analyzed the transition from the start of construction to the completion and the artists involved, while following the set age group, and summarized the analysis results in the conclusion.

はじめに

ドモドッソラは、ローマ時代以前にアルプス山脈中・西部に定住したケルト人もしくはリゲーリア人であるレポンツィ（レポンティ、レポンティーニとも言う）によって創設された歴史ある古都であり、現在の行政区分ではピエモンテ州ヴェルバーノ・クジオ・オッソラ県の一都市となっている⁽¹⁾。スイスとの国境近くに位置する、周辺地域を含め人口約18,000人⁽²⁾のこの基礎自治体（コムーネ）は、オッソラ地方ないしはヴァル・ドッソラの413メートルにも達する渓谷の平地に形成された中心都市で、オッソラ渓谷を形成しながら北から南に流れるトーチェ川の右岸（西岸）にある。世界遺産「ピエモンテ州とロンバルディア州のサクリ・モンティ」の構成資産の一つであるドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオ（図1）は、17世紀における「十字架の道行き」（ヴィア・クルーチス）信心の流布を背景として、この平地の南側の郊外にある高さ約150メートルのマッターレツァと呼ばれる丘とその斜面を活用し、キリストが十字架を負って磔刑場であるカルヴァリオ（ゴルゴタ）まで辿った道行きを表現することを目的として、17世紀後半に着工された総体である。

このドモドッソラのサクロ・モンテに関する研究は、その他の主要なサクロ・モンテ群の研究の蓄積に比して、今もって1980年にトゥッリオ・ベルタミーニが『オシェッラーナ』誌上に発表した「ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオ」⁽³⁾が基本文献となっている。その後

刊行された同サクロ・モンテに関する数少ない単行書や論考も、テキストは同じベルタミーニが担当するか、他者が執筆した場合にも多くを彼の成果に依拠しているのが実情である。こうした中、2012年にB. ボランディーニ女史がトレント大学に提出した博士論文『ディオニジ・ブッソラ 1612-1687』中のドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオに関する第7章1節⁽⁴⁾は、建造に関わる出納簿や彫刻家が依頼主に宛てた書簡といった古資料の徹底的な渉猟や精読、最新の調査・研究成果に関する情報収集に基づいて、ベルタミーニでは言及されていない事実や、彼とは異なった見解も幾つか示している点で特筆される。しかし日本に至っては、稿者が拙著中で簡単に紹介⁽⁵⁾しただけで、その成立過程や礼拝堂装飾を概説した論考は管見の限り皆無である。

そこで、現地調査や聞き取り、古文書等の原典参照は不十分であるものの、稿者が進めるサクロ・モンテ間における芸術家の移動や共同制作の実態などに関する全体的把握の一環として、ベルタミーニやボランディーニらの研究成果に拠りながら、このサクロ・モンテの全体像、とりわけ礼拝堂装飾に携わった画家や彫刻家たちの把握を試みる。また、その際、各礼拝堂の建造時期や完成までに関わった芸術家たちの名前や活動時期を表に落とし込むことで、その変遷を視覚的に把握しやすいものにした。

本稿の展開としては、まず1章でドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオの着工までの経緯について述べ、2章で現在の巡礼の行程に沿いながら、各礼拝堂の

建造とその装飾に従事した芸術家たちを可能な限り明示し、併せて情報を落とし込んだ変遷表（表1、表2）を作成し、完成までの約300年間に画期が可能か否かを明らかにする。そして3章において、設定した年代区分に従いながら、着工以降、完成までの変遷、並びに関わった芸術家たちの分析を行い、最後の結語でそれらの結果の総括を行う。

1. 着工までの経緯

ドモドッソラのサクロ・モンテの近くに先行して建造されていたサクロ・モンテ群は、いずれも聖フランチェスコの弟子たち、すなわち小さき兄弟会修道士の発議や構想で建造されたものであった。フランシスコ会は、周知のように、キリスト教側の聖地パレスティナの番人であり、エルサレムの聖墳墓聖堂に常駐して聖務を行うとともに、西欧から訪れる巡礼者の保護や案内役を務めており、十字軍時代に起源をもつ「十字架の道行き」（ヴィア・クルーチス）の信心業も、フランシスコ会士が後に流布させたものであった。このようなフランシスコ会士と聖地パレスティナとの関係から、北西イタリアのヴァラッロに、聖地再現型の最初のサクロ・モンテがオブセルバント派小さき兄弟会士ベルナルディーノ・カイーミ神父の構想に基づき、15世紀の第4四半期に着工されて以降、オルタやヴァレーゼなどにも壮麗なサクロ・モンテが建造されていくが、それらの総体もフランシスコ会から分派したカプチン・フランシスコ修道会士の発議、構想によるもの

であった⁽⁶⁾。

ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオも、同様に、カプチン派修道院の司祭にして説教師、ジョアキーノ・ダ・カッサーノとアンドレア・ダ・ロの2人が、1656年の四旬節期にドモドッソラの教区教会で説教中、サクロ・モンテの具現を提案したことに始まる。カプチン派神父フェデーレ・ダ・サン・ジェルマーノも、わずかに先行して1620年にオローパで説教していたが、その説教は信徒たちにオローパのサクロ・モンテの初期の複数の礼拝堂群を建造させるほど熱狂的であったという。

オッソラの地域共同体は、ヴァラッロやオルタ、ヴァレーゼの巡礼地、さらにはアローナやロカルノ、近隣のグイッファの巡礼地についても十分認識しており、修道士たちから提案があった日以来、具体的実現に向けて検討を開始し、町の南の郊外にあるマッタレッラの丘を最適地と定めた。マッタレッラの丘には、ローマ時代以前から人の出入りが指摘されている他、同所からはその後の人の定着を証明する初期キリスト教時代と推測される聖堂の遺構や6世紀の墓碑も発掘されている。次いで、この丘はフランク人に支配され、おそらくこの間にビザンティン、もしくはロンバルド起源の「カストゥルム・ムタレッラエ（ムタレッラ城）」（現在マッタレッラ城と呼称）をその岩上に帯びたと考えられる。そして1014年にザクセンの皇帝ハインリヒ2世がノヴァーラ教会にオッソラ委員会を寄進してからは、自動的にノヴァーラ教会、すなわちノヴァーラ司教の所有地とされ、城が

15世紀にアルプスを南下したスイス人やヴァッレザーノ人に破壊されるまでは、ノヴァーラ司教が建てた館も擁していた。しかし、サクロ・モンテ建造の発議がなされた当時は、この森は放置状態であったと考えられる⁽⁷⁾。

建造委員会は、ノヴァーラ司教座聖堂参事会代表の許可を得た後、礼拝堂を設置する場所、すなわち留の目印とするため、丘上とルート沿いに十字架を設置する準備を進め、丘上にイエス・キリストの十字架と、その他2カ所に十字架を設置した。1657年には各留の正確な配列を含む総図面も起草され、欠けている留の場所に十字架が設置されるとともに、早期に設置されていた幾つかの十字架に対する若干の修正も行われた。こうして都市計画的なプランが確定されると、間もなく、この郊外地域の南門に、司教訪問で来ていたノヴァーラ司教ジュリオ・マリア・オデスカルキが見守る中、入口となるモニュメンタルなアーチが建造され、次いで丘上の巡礼聖堂の礎石も置かれた。

2. 現在の巡礼の行程と礼拝堂群、並びにその装飾に従事した芸術家たち

サクロ・モンテ・カルヴァリオは上述のような経緯で着工に至ったが、その後の完成に至るまでの建設や建築家の変遷、堂内の装飾や設営に携わった彫刻家や画家の活動時期や変遷については、先行研究はもっぱら活字に拠っており、画期も明確には行っておらず、把握がしにくい。そこで本

稿では、先に現在の巡礼ルートに沿って各礼拝堂の概観を行いながら、従事した芸術家たちの情報を表に落とし込む作業を行い、建設や装飾時期の画期等が可能か否かを明らかにする。併せて図1と表1、2を参照されたい。

2.1 巡礼コースの風景的特徴

巡礼路はドモドッソラの郊外の道がそれに当たっており、上方部分には森のような既述のマッタレツラの丘がある。数多くの巡礼者によって踏み慣らされた当初からの舗装が今も痕跡を留めるコースを進むと、遠くにカプチン会の古い修道院の廃屋が寂れた森に埋もれて姿を見せる。段々畑によって区切られた幾つかの草地は、同会士たちが19世紀に放棄しなければならなかった耕作地の跡である。2本の直線区間によって構成された長い上り坂が始まる第6堂「ヴェロニカ」を過ぎると、風景は、場所によって岩が表面に露出した雑木混じりの広大な森となる。

上り坂の終点にある第7堂「イエスの二度目の転倒」は、丘上の総体への到着を示している。アンジェロ・マルツィによれば⁽⁸⁾、司教オデスカルキは、1658年に、マッタレツラの城の遺構の草木がない空間は、厳密に左右対称的なイタリア風のルネサンス的世俗庭園というより、神による自然の秩序を喚起するような樹木の配列で整備するよう指示したという。実際、カルヴァリオの丘上の聖なる庭では、草木は整然として申し分なく整備されている。現在、巡礼聖堂や丘上の礼拝堂群の周辺は、在来種はもちろんのこと、外来種の樹木に

よっても覆われている。ちなみに後者の外来種は、自然環境を豊かにするため前世紀に導入されたものである。

2.2 十字架の道行きの礼拝堂群と建造・装飾に携わった建築家・彫刻家・画家

以下、ロズミーニ会の2つの寄宿学校の間にあるベアタ・ヴェルジネ・デッラ・ネーヴェ教会の前にある植栽された広場から始まる行程を順に辿っていくが、列挙する礼拝堂の番号は、十字架の道行きの「留」(スタチオ)に対応していることを、ここで予め断っておく。

第1堂「ピラトの前のイエス」

このサクロ・モンテの巡礼の行程は、先のベアタ・ヴェルジネ・デッラ・ネーヴェ小礼拝堂から始まっており、そこにはかつて、ヴァラッロのサクロ・モンテでアレッシが起草した手本に準じて建造された「ピラトのアーチ」と呼ばれたモニュメンタルな導入用のアーチが建っていたが、19世紀に取り壊された。しかし同アーチは、1772年の建築家ピエル・マリア・ペリーニ(以下P.M.ペリーニ)の版画中の大通りの中央に確認できる。

現在、第1堂がある場所には、その建築と壁画ゆえに、このサクロ・モンテ全体の中で最も美しいと見做されていた別の礼拝堂が存在していた。1735年8月23日付けの証書をもって同礼拝堂の土地を寄進したのは貴族階級のフラミニア・シルヴァ・ルーガ夫人であった。次いで、1742年から翌年にかけて建築家ペリーニ兄弟の設計でアプシスのある矩形プランの礼拝堂が建造され、ミラノの画家カルロ・カネバに

よって壁面全体に壁画が施された。壁画制作は、司教区顧問パオロ・デッラ・シルヴァ師の費用で1746年に行われたが、彼は関連する彫刻群に対してもツェッキノー金貨25枚を寄進していた。しかしこの最初の礼拝堂は、ナポレオンによる没収後の1822年に国有となって貧者に貸し出された後、1830年に爆弾によって破壊された。その後同所には、不詳の画家が十字架の道行きのミステーロを描いた慎ましい小壁龕が一時的に置かれていた。

第2、第3堂と同様に、マッタレッラの丘の麓の住宅街の一部となっている現在の礼拝堂は、不詳の建築家が集中式プランと擬古典的様式で1900年⁽⁹⁾に建造したものである。白御影石の美しい円柱を伴った柱廊は、1768年にP.M.ペリーニが建設した第11堂の構造を参考に、巡礼ルート側の5スパンだけが具現された後、未完のまま残された。

堂内(図2)の21体の人物像はビエッラの彫刻家ピエトロ・モスカの作品で、エルサレムのピラトの官邸を模したアトリウムに配された。そして1909年10月17日、荘重に祝別が行われ、一般に公開された。

第2堂「十字架を課されるイエス」

十字架を課されカルヴァリオへ向かうイエスの留に当たる第2堂(図3)は、ヴァル・ディンテルヴィ出身の建築家トンマーゾ・ラッザーロ親方⁽¹⁰⁾の参加で1666年に着工、1670年代に完成されたと考えられる。主軸の2面が側面より長い八角形プランのこの建物の類型は、すでに第4堂、また、オルタの第17堂の型を手本としている。1735年には優雅なポーチと、その上

にフルハイトで破風が載せられた。

1677年から1681年にかけて、ミラノの彫刻家ディオニジ・ブッソラ（1615-87年）は息子のチェーザレ・ブッソラ（1653-1735年より後）⁽¹¹⁾と共作して、12体⁽¹²⁾の人物と3頭の馬、1匹の犬のテラコッタ像を設置した。具体的には、場面の中央にキリストがおり、取り囲む死刑執行人たちに十字架を担わされている。背景に馬上の兵士や小姓、民衆が半円状に配される一方、犬は人間たちの行為に無関心に蹲り、空いた空間を占有している。第3のグループは、後続の礼拝堂で展開されるカルヴァリオの語りと空間的に連続するように、泥棒たちの十字架や拷問具を設置するのに必要な道具を持って場面から抜け出て、前方の巡礼ルートの方角に向かっている。死刑執行人の1人は、ジョヴァンニ・デンリーコがヴァラッロの「エツケ・ホモ」の礼拝堂で成形した人物像に影響されているように思われるが、デンリーコの人物像はもともヴァラッロの「磔刑」の礼拝堂でガウデンツィオ・フェッラーリが設置した端役を参照したものであった。つまり、「サクロ・モンテの芸術家たち」は100年を隔ててもなお、明らかに互いに影響し合っていたと言える。

テラコッタ像の彩色は、ミラノ出身の画家ジョヴァンニ・サンピエトロが1703年に行ったが、彼はさらに同年、壁面にもエルサレムの家屋や人物を騙し絵の手法で描き出した。その後1735年にこの総体に十字架の道行きが正式に設置された際には、画家セコンド・セステイーニによって、前方のポーチの内側と外側の壁面に、パレス

ティナのキリストゆかりの聖所を訪れた信徒に教皇が賦与するのと同じ免償が賦与されるとする銘文を添えて壁画が施された。

第3堂「最初の転倒」

第3堂（図4）は、未完の建造作業の完成を目指して、このサクロ・モンテで建造された最後の礼拝堂であり、1907年6月19日にノヴァーラ司教ジュゼッペ・ガンバ師によって礎石が置かれた。設計者は、トリノの技師ステファノ・モッリで、外壁のテュンパヌム上にガンバ司教の紋章とともに刻まれた碑銘が証しているように、1908年に完成されている。この礼拝堂はすでに建造済みの他の礼拝堂群に比べて面積が小さく、プランは矩形で、6つの窓や軒持ち送りによって支持されたシーマ、2本の円柱が支える小さなプロナオスが付いている。また、破風やコーニス、開口部の装飾にはウンベルト様式の影響が看取される。

堂内の6体の木彫群は1947年に設置されたもので、ミラノのパヴォニアーノ・アルティジャネッリ校の彫刻家ベッルータの作品である。また、一部は煉瓦積み、一部は壁画によって同年に設営された背景は、ロズミーニ会のジョルジョ・サヴァッリオ教授の意匠に基づいて具現されたものである。

第4堂「聖母との出会い」

この第4堂の礼拝堂（図5）は、おそらくトンマーゾ・ラッザーロ親方の設計で、1661年3月21日に礎石が置かれ、1664年に完成された。この時期は、第2堂「十字架を課されるイエス」が建立された第一建造期に当たっており、建築類型は第2堂と共通した2側面が長い八角形プランとなっ

ている。2本柱が対になったトスカーナ式オーダーの前廊は1701年に付加されたものである。

堂内の14体⁽¹³⁾の人物像と2頭の馬像は、1664年に設置されたもので、ゴルゴタへ向かう途上でのイエスと聖母マリアとの出会いを表現している。ドモドッソラのサクロ・モンテ全体の中で最も優れた群像の1つに数えられるこれらの群像の作者は、ディオニジ・ブッソラと、ほぼ義弟と言ってもよい助手のシヨヴァンニ・バッティスタ・ヴォルピーノ(1640頃-80年頃)⁽¹⁴⁾である。主要な中央場面では、キリストやマリア、さまざまな人物、馬が、ブッソラのお定まりのバロック趣味に従って入り混じっている。背景の二次的群像は、盗人や甲状腺腫の男を含む看守たちの堂々たる歩みを表現しているが、これらの群像はそのリアリズムゆえに注文者たちを失望させたらしく、ブッソラはカピス宛の1672年11月25日の書簡に、「…別の所(礼拝堂)で侮辱されたと感じる人をこれ以上刺激しないよう甲状腺腫の男たちをもう作らない方がよいように思われた…」⁽¹⁵⁾と記していた。しかしその奇形は、ヴァラッロではタバクケッティによる第36堂「カルヴァリオに上る」の群像を通してすでに表現対象となっていたし、視線を主場面向けている甲状腺腫の看守や、キリストを繋ぎとめている紐は、2つの群像間の結びつきを強める役割を果たしていると言える。

背景とヴォールトの壁画は、ジョヴァンニ・サンピエトロが1703-1704年に描いたものである。

第5堂「キレネのシモン」

第5堂(図6)は、創設時に第4留の十字架が打ち込まれた場所に、ソマリア出身の建築家ジャン・ルーカ・カヴァッツィ(1762-1838年)の設計⁽¹⁶⁾、ジャコモ・メッレリオ伯爵の費用で1835年に着工された、このカルヴァリオ山上に存在する唯一の19世紀の建築である。同堂は円形プランで半球状のクーポラを持ち、花崗岩製の4本のドーリス式の柱によって構成されたプロナオスが付いている。しかし、建物自体は当時西欧やアメリカで普及した異例の新古典主義様式で1837年に完成されたものの、堂内の装飾は、この聖なる総体の所有権をめぐる争いに失望したメッレリオ伯爵によって未完のままとされた。

とはいえ、1848年には同伯爵(1837年歿)の遺贈を活用して、画家ルイジ・ハルトマン(1807-84年)が壁体やヴォールトにカルヴァリオに十字架を運ぶキレネのシモンの場面をエキゾテックに描いた。堂内の扉の上部には、メッレリオ伯爵とこの画家に関するラテン語による記載がある。

続いて1957年のサクロ・モンテ・カルヴァリオの創設300周年の折に、そこにヴァル・ガルデーナのヴィンチェンツォ・デーメッツ・デイ・オルティゼーイ社制作の7体の木彫像が設置された。

第6堂「ヴェロニカ」

この礼拝堂(図7)は、ベルタミーニによれば、1770年より少し前⁽¹⁷⁾に着工されたが、資金不足で長期に亘って未完成のままであった。同堂には、2組の対になった2本柱に支持された大きな天井まで届くアーチ付きの前廊がある。内部の平面図は

風変わりで、かなり不規則な楕円形をしているが、それは設営予定だった堂内の場面に
対応するためであったと考えられる。同堂の設計者としては、当時この山で作業に
従事していた第8堂と第9堂の設計者P.M.
ペリーニ親方が想定される。

堂内の壁面には、1854年によくイエスとヴェロニカとの出会いのミステーク
が画家パオロ・ライネーリ・ディ・カノッ
ビオ(1836より前-59年より後)によって
描かれたが、その壁画は創設300周年に当
たる1957年に除去されてしまった。そし
て現在見られるように9体の木彫像が配さ
れ、背景には、一部は壁、一部は壁画に
よってエルサレムの通りが再現された。木
彫群は、第5堂と同様に、ヴィンチェン
ツォ・デーメッツ・ディ・オルティゼーイ
社が制作したものである。

第7堂「二度目の転倒」

第7留に当たるこの礼拝堂(図8)は、
1770年より少し前に建造され、その後数
年で完成された。当時カルヴァリオではピ
エル・マリア・ペリーニ・ディ・ヴァル・
ディンテルヴィ親方が、第8堂、第11堂に
図面を提供して作業を指揮しており、本堂
の建造にも彼が関わった⁽¹⁸⁾。この建物
は、高さと同行きが等しい矩形プランに基
づいて建てられているが、ファサードが舞
台の袖のように屋根から突き出てバロック
的な技巧で湾曲し、中央のスペッキア
トゥーラを際立たせている。また、イオニ
ア式オーダーの2種の付柱は二重の楣式構
造で区切られ、下層は壁龕状、窓状の2層
からなるが、付柱は下層のファサード面一
杯に展開にしている。さらにファサード上

層の迫持には半円形の優美な破風も付けら
れている。

堂内には、19世紀の最後の10年間⁽¹⁹⁾
に、アメーノ出身の画家アントニオ・リナ
ルディが幾つかの装飾とイエスの二度目の
転倒を表現した大きな油彩画を手掛けた⁽²⁰⁾。

1940年には、ロズミーニ会のジョル
ジョ・サヴァーリオ教授の設計に基づい
て、一部は石積み、一部は壁画によってエ
ルサレムの通りを表わした場面が再設営さ
れ、そこにミラノのパヴォニアノ・アル
ティジャネッリ校の彫刻家ベッルータが制
作した5体の木彫像が設置され、同年8月
15日に披露された。

第8堂「敬虔な婦人たちとの出会い」

この礼拝堂(図9)は、第7堂より数年
後の1773年に着工、1778年に完成された
もので、設計者は、古文書館の史料から確
実にP.M.ペリーニであることが判明して
いる。建築家の親方であるこのペリーニが
1772年頃制作した、同サクロ・モンテの
初期段階を知る上で貴重な版画には、「ベ
アタ・ヴェルジネ・マリア小礼拝堂」と
「ロレートの聖家」の近くに、「アーケー
ドと、その上手に礼拝堂を造るための場
所」という記載を識別できる。同堂のプラ
ンはほぼ正方形で、ファサードは2種類の
開口部によって波打つとともに、地元の石
材を用いた付柱と円柱で支持された前廊が
付いているかのように装飾されている。

この礼拝堂では中断なく堂内の設営作業
が続けられ、1779年から80年にかけて、
クザーノ出身のジュゼッペとジョヴァン
ニ・アントニオのトッリチェッラ兄弟が、

背景に複雑で奇抜な壁画を手掛けた。続いて1782年には、コモ県ラッリオ出身の彫塑家ステファノ・サルテリオ（1730-1806年）が制作した地元の粘土を使用した25体の像が据えられた。それらの彫刻像の優美さは際立っているが、ピエモンテやロンバルディアのサクロ・モンテ群で制作されてきた等身の彫刻群に比べてやや小さい。演出は伝統的で、場面の中央にキリスト、その右側に敬虔な婦人たちが配される一方、民衆や兵士たちはその群像の周囲を動き回るように配されている。

第9堂「三度目の転倒」

この礼拝堂（図10）は、1664年から1666年までの間にドモドッソラの聖三位一体兄弟会の費用で建造されたもので、礎石は1664年4月24日に置かれた。その建造は、A. マルツィによれば⁽²¹⁾、当時近くの巡礼聖堂の建造現場で指揮をとっていたトンマーゾ・ラッザーロ親方に帰される。オルタやヴァレーゼ、グイッファに現存する手本に倣って、ドモドッソラでもアーケードが付いた八角形プランの礼拝堂が欠けることはなかった。同堂は、アーケードに保護用の壁体が意図的に省かれているため、周囲の環境に効果的に溶け込んでいる。

1708年には、オルタでも1682年から1690年まで活動したミラノ出身の彫刻家ジュゼッペ・ルズナーティ（1647-1713年）が、22体の人物像と2頭の馬像を設置してキリストの三度目の転倒のミステロを表現した。彼は、ディオニジ・ブッソラに倣い、彫塑群の動きにいつそう強勢を加えて場面をドラマティックにしようとし

た。さらに二次的な登場人物たちの動きを細分化し、空間を附属の人物像（幾体かは壁に直貼り）で満たした。背景では護衛兵や看守たちが槍や梯子、つるはしを効果的に交差させ、両側面に配された騎馬像と均衡を保っている。

次いで2年後の1710年には、ロマニャーノ出身の画家タルクイーニオ・グラッシ（1656-1733年）が彫刻群に彩色を施すとともに、礼拝堂全体に壁画も手掛けた。

第10堂「聖衣を剥奪され苦水を飲まされるイエス」

この礼拝堂（図11）は、誤って1768-78年に作業の指揮をとったP. M. ベリーニ親方（前方の前廊は彼に帰される）に帰されたが、アントニオとドメニコのベリーニ兄弟がカルヴァリオで働いた18世紀初め頃に着工されたものである⁽²²⁾。同堂は長短四辺ずつの八角形プランから出発したが、下層では、両側壁と奥壁にそれぞれ大アプシスと小アプシスが結合されて、直線と曲線が混合したプランになっている。

29体の人物像と3頭の馬像によってキリストの聖衣剥奪を表現する彫刻群は、第9堂と同様にジュゼッペ・ルズナーティの手になるもので、18世紀の最初の10年間に設置された。ここでは彫刻群が複数のグループに分けられ、異なった場所に配されることで、空間が有効に活用されている。

1764年には、ルズナーティの彫刻群にヴァルセージアのチェッリオ出身のロレンツォ・ペラチーノ（1710-89年）が彩色を施すとともに、かつてガウデンツィオ・フェッラーリが彫刻による場面を壁画で効果的に補完したヴァラッロの手本に倣っ

て、同堂全体に生彩に富む壁画も手掛けた。

第11堂「十字架につける」

この礼拝堂（図12）の礎石は、基部に嵌め込まれた石が証明している通り、1768年4月19日に置かれた。地元の石を使用した付柱や円柱に支えられた半六角形の前廊をもつ直線と曲線が混合したプランの同堂の設計、施工者は、建築家P.M.ペリーニであった。前廊は3面に限定されており、まるで広場に向けて開かれた舞台か劇場のように見える。ペリーニの並外れた創意は、20世紀初頭に再び第1堂で採用されることになる。

1776年に配された23体の人物像と2頭の馬像は、ヴァルセージアのロッサ出身の彫塑家ジョヴァンニ・ルーカ・ライネーリの作品で、キリストと2人の盗人が十字架に付けられているところを表現している。

1779年から1780年にかけて背景の壁画を手掛けたのは、クザーノ出身のジュゼッペとジョヴァンニ・アントニオ、アントニオ・マリアのトリッチェッラ兄弟⁽²³⁾であった。なお、アントニオ・マリア・トリッチェッラは彫刻群に彩色も施している。

巡礼聖堂

至聖なるキリストの十字架像に献堂され、この山の岩の上に聳える巡礼聖堂は、側面が長い八角形プランをもち、第12堂（磔刑）、第13堂（十字架降下）、第14堂（聖墳墓）、そして「十字架の幻視」の礼拝堂などを内包している。この総体の建設上きわめて重要なこの聖堂は、1657年にトンマーゾ・ラッザーロ親方がおそらく自身の設計に基づいて職人や息子たちと着工

し、1672年にはクーポラも完成したが、聖堂が聖別されたのは1690年のことであった。オーダーのない付柱と窪みによる外壁の装飾は、建設上のある種の息切れを示してはいるが、一方で、礼拝堂群の建造はすでに進行中であった。内部では、迫持上の4つの開口部と基部が楕円形の中央のランタンから光が注ぎ、角張った付柱はアーチの迫持部分で断ち切られている。

礼拝堂以外の主要な美術作品のみ言及しておけば、突出した付柱の張り出しの上に1670年に設置された白く塗られた8体の預言者像⁽²⁴⁾は、ディオニジ・ブッソラと助手のヴォルピーノ、もう1人の助手サンティーノが予め準備していたテラコッタ像である。まるで互いに会話をしているのように見えるのは、それらが単に装飾のためだけではなく、おそらく堂内で展開されている神学的会話に参加する役割を帯びているためで、その発想はグイッファの「戴冠」の礼拝堂でも採用されている。クーポラで内陣側を向き、光線のマンドルラに包まれている復活のキリスト像もまた、ブッソラとヴォルピーノの手に帰されている。一方、彩色は地元の画家で彫刻家のジュリオ・グアリオの手になる。

第12堂「磔刑」

第12堂（図13）は、巡礼聖堂の内陣の奥にあり、彫刻家ディオニジ・ブッソラとヴォルピーノの手になるキリスト像によって、ゴルゴタでの磔刑の様子を悲劇的に表現している。祭壇から周囲の空間を支配しているこの超等身大のキリスト像は、ブッソラがこのサクロ・モンテに残した最高傑作と言えるもので、1662年3月に設置され

た。そして続く4月4日には、大勢の聖職者と民衆の参加者が見守る中、正式に祝別された。背景の絵は1921年にチーノ（フランチェスコ）・ボツェッティが付加したものであるため、ここでは度外視してイメージした方がよい。

中央の群像の両脇に置かれた大きな悲しみの聖母像と聖ヨハネ像、そして豪華に象嵌された大理石の祭壇上の十字架の基部に抱き着いて涙するマグダラの MARIA 像もブッソラとヴォルピーノによる作品であるが、それらが設置されたのは翌年6月のことであった。設置したのはもちろん彼ら自身であるが、4体の彫刻に彩色したのはヴォルピーノ⁽²⁵⁾であった。なお、ストウッコはメリデ出身のアントニオ・ロンカーティ（1638頃-1712年）⁽²⁶⁾が1693年に制作したものである。

第13堂「十字架降下」

第13堂（図14）も、巡礼聖堂の入口から見て右側の礼拝堂に設置されている。

最新の研究書⁽²⁷⁾によれば、10体のテラコッタ像は、第12堂と同様にディオニジ・ブッソラとヴォルピーノが、1663年から1664年一杯までの間に制作したものである。そしてそれらの彩色は、約30年後の1703年にミラノ出身のジョヴァンニ・サンピエトロによって施された。ブッソラは疑いなく、ヴァラッロの同じ主題の礼拝堂でジョヴァンニ・デンリーコが手掛けた手本を知っており、この手本を参照したと考えられるが、ヴァラッロより空間が狭いため、盗人たちを十字架上に残したまま、10体の像を異なる高さに配すとともに、十字架と梯子を互いに平行に設置し

た。また、彫刻群を垂直方向に設置することで空間の課題を克服し、構図的に完璧な均衡に達している。

背景の壁画は、彫刻像に彩色も施したジョヴァンニ・サンピエトロが手掛けたもので、1699年の制作になる。

「十字架の幻視」の礼拝堂

巡礼聖堂の当初の計画では、十字架の道行きの連続とは関係のない留として「降誕」と「マギの礼拝」のミステーロが表現されるはずであったが、聖堂内の神学的内容に一貫性を与えるために実際に設営されたのは、居合わせたヨセフが呆然と立ち尽くす中、幼児イエスと聖母マリアの眼前に、救済の使命を予告する十字架が2天使に支えられて天空に出現する幻視の場面（図15）であった。

聖母と聖ヨセフを含む彫刻群についてはディオニジ・ブッソラと助手のヴォルピーノとする説と、ブッソラたちではないとする説に分かれている⁽²⁸⁾。いずれにしても、ガスパレ・シュトッカルパー男爵を表現していたマギ像と彼の小姓像は取り去られ、後に第15堂の復活の礼拝堂の彫刻群に付加された。

壁画は、画家ジョヴァンニ・サンピエトロが1703年に制作したものである。

第14堂「聖墳墓」

グロッタに似せるために土台の岩を穿って建造された第14堂の聖墳墓（図16）へは、巡礼聖堂の外階段を下りて至るようになっている。この礼拝堂には、ドモドッソラのカルヴァリオのサクロ・モンテの創設者であり後援者でもあった偉大な信徒、ジョヴァンニ・マッテオ・カピスの亡骸も

埋葬されている。

テラコッタの死せるキリスト像は、彫刻家ディオニジ・ブッソラがこのサクロ・モンテに設置した最初の作品であり、1661年9月14日に大勢の聖職者やオッソラの人々が見守るなか、聖墳墓に厳かに横たえられた。キリストの両側にいる2体の天使像も同様にブッソラが制作したものであるが、制作、設置は2年後の1663年になされた。2天使像の彩色はヴォルピーノが施している。その他ブッソラは受難具をもつ4体の飛翔する小天使像も制作したが、それらは現在は取り除かれてしまっている。

壁面は1877年から1882年までの間にフェリーチェ・パリエッティが描いたもので、1915年には礼拝堂全体がピエトロ・モスカ（1878-1956年）によって整備された。

第15堂「復活」

17世紀末には、このカルヴァリオのサクロ・モンテの理想的実現のためには、巡礼聖堂から少し離れたヴィア・レジーアの終点に当たる丘の頂上に、復活の礼拝堂を建造する必要があると考えられたらしい。「十字架の道行き」は、1731年4月3日に教皇クレメンス12世が起草した勅書で確定されたように、15番目の留を想定していなかった⁽²⁹⁾。しかし、ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオの理念の基礎になっている神学的構想では、その目的と昇華のためには、復活とキリストの勝利の栄光—巡礼聖堂内で立体的に表現されている聖会話中にはっきりと表明されている—は欠かせず、キリストの受難と死のドラマは、聖墳墓ではなく、栄光の復活で締め

括られるべきものであった。

同堂の建造は、アントニオとドメニコのペリーニ兄弟の設計で1690年4月18日に開始されたが、同所の掘削中に、既述のように、マッタレッラ城（カストゥルム・ムタレッラエ）の総体の一部であったものの、城よりも歴史的に古い2つのアプシスをもった初期キリスト教時代の聖母マリア教会堂と思われる遺構が発掘された。その後、1700年7月26日の司教による教書によれば、同所に祝福が与えられ、礎石の設置が許可されている。作業は1708年に終わったものの、この第15堂（図17）は依然として未完成で、外壁には漆喰仕上げも装飾も施されていない。同堂は正方形プランで、他の礼拝堂群に比べ面積が広く、高さも高い。

キリストの復活の壮大な場面は、ジュゼッペ・ルズナーティが制作し1706年内に設置した10体のテラコッタ像⁽³⁰⁾と、ブッソラが「十字架の幻視」の礼拝堂の改案前の最初の構想時に制作し、18世紀初め頃この第15堂に転用されたマジ像（このカルヴァリオの後援者でオッソラに亡命していたカピスの友人のガスパレ・シュトッカルパー・デッラ・トッレ男爵）と、付き添って彼の武具を運ぶ黒人の小姓像⁽³¹⁾、さらに一部は浮彫、一部は巨大なクーポラへと展開していく壁画によって表現されている。効果的な壁画を1706年に手掛けたのはここでもジョヴァンニ・サンピエトロであった。彼が描いた天蓋状の広いクーポラでは、多数の天使が各所に効果的に散在して天国の栄光を称えている。また、擬古典的で華やかな建築に縁取られている両側

壁の2つの壁画は、《弟子たちへのキリストの出現》と《エマオでの弟子たちへのキリストの出現》を表現している。ちなみにサンピエトロは、彫刻像に彩色も施すとともに、天国の聖人たちの間に自身の肖像も描き込んでいる。

なお同堂のクリプタにはロズミーニ会神父たちの墓がある。

サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ礼拝堂とロレートの聖家

十字架の道行きとは関係はないが、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ礼拝堂とロレートの聖家についてもここで触れておきたい。

前者は、古いマッタレラの城壁外の山道側に、16世紀末に不詳の画家によって聖母子像が壁に描かれた聖龕（ピローネ）に遡る。この聖龕はサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ（恩寵の聖母）の聖龕と呼ばれており、その後大幅な修復を行った上で、1660年から67年にかけて、おそらくトンマーゾ・ラッザーロ親方によってサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ礼拝堂として建造し直された。16世紀末の聖母子像の絵は、この礼拝堂の大祭壇上の壁に嵌め込まれ、ジョヴァンニ・サンピエトロが描いた《天使たちの栄光》の壁画によって取り囲まれている。

また、後者のロレートの聖家（図18）は、カピスの希望で、1674年から94年にかけて、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ礼拝堂の北側に、同堂と行き来できるように隣接して建造されたもので、室内には、ディオニジ・ブッソラが1677年に制作し、1702年にジョヴァンニ・サンピ

エトロが彩色した受胎告知像、すなわち告知する天使像と告知を受けるマリア像の2体が設置された。両像の間の上方の壁龕に設置されている黒いマリア像の制作者は不詳である。

2.3 表の分析

以上、先行研究の成果を精査しながら、サクロ・モンテ・カルヴァリオの礼拝堂群やその他の主要な建造物と堂内の装飾、並びにそれらに携わった芸術家たちを概観し、それらの情報を礼拝堂ごとに表1に落とし込んだ。次いでさらに、表1を基に、データを分野ごとに「建築家」、「彫刻家」、「画家」に分け、活動時期の早い作家から順に入れ込むと表2のようになる。また表2には、不詳の作家を除き、彼らの出身地や現在の国・州区分の情報も落とし込むようにした。

これら2つの表を分析すると、1656年から1950年代にまで及んだ建造は、大きく四期に分けて展開されたように思われる。すなわち第1期は1657年の着工から1710年頃まで、第2期は第1堂の再建が開始された1740年代から1800年頃まで、次いで第3期は第5堂が着工される1830年代から1880年頃まで、そして最後の第4期は第3堂が着工される1900年代から1950年代までである。なお、第1期はさらに、建築家のトンマーゾ・ラッザーロ親方が活躍した1657年から1690年頃までと、彼に代わってアントニオとドメニコのペリーニ兄弟が建設に従事するようになった1690年代から1710年頃までに分けることも可能と考えられる。

3. 着工後の建造の変遷と礼拝堂群の装飾

さて、本章では、2章における礼拝堂ごとの概観、分析から導き出した画期順に時系列で、着工から完成までの建造や礼拝堂装飾の変遷を、関わった重要な人物、芸術家たちに言及しながら概観する。

3.1 第1期 (1656年～1710年頃)

3.1.1 第1期前半

建築

まず第1期の建築から見ていけば、1656年から1690年頃までの建設に関する諸プロジェクトは、ベルタミーニをはじめとする研究者たち⁽³²⁾によって、ヴァル・ディンテルヴィ出身のトンマーズ・ラッザーロ親方に帰されている。彼は、息子や職人たちを使って小さな会社を営み、オッソラ中に少なからぬ教会堂を建設していた企業家であり、また建築家でもあった。1659年には、至聖なるキリストの十字架像の巡礼聖堂の建造は彼らによって蛇腹まで達し、1672年にはクーポラが架けられた。ちなみに、祝祭日に城の残骸の片づけや土台の掘削のために働いた者には、その労働に対して40日の免償が認められた。また、その間の1656年から1670年代初めまでの間には、最初の三留の礼拝堂、すなわち第4堂、第9堂、第2堂の建設が、おそらく同じトンマーズ・ラッザーロによる図面提供、建設準備によって完成へと導かれた。

教会財産管理委員会は、当初から、共同体の代表者であり、また法学者でもあった高名な地方政治家ジョヴァンニ・マッテ

オ・カピスがその推進役となっていた。建設資金は地元の有力人士から提供されたが、さまざまな社会的階層に属する信徒からも、その財力に応じた資金提供がなされた⁽³³⁾。他方で森に囲まれ樹木が生い茂る庭園づくりを切望した司教は、1657年5月に実施した司教訪問の間に、規制を伴った建設と管理のための法令を翌1658年9月に公布する準備を整え、十字架の道行きのミステリーと設置された十字架との照合も行った。このサクロ・モンテは教区教会に委ねられ、その運営責任はカピスにあったものの、司教には、ヴァラッロやオルタのサクロ・モンテに対してバスカペが与えた規制に倣い、諸プロジェクトに対する承認はもちろん、画家や彫刻家の選出権も担保された。なお、1658年9月の布告によって、マッタレッラの丘はその名称を正式に変更し、「サクロ・モンテ・カルヴァリオ」⁽³⁴⁾と呼ばれることになった。

諸関係の調整も、巡礼聖堂や初期の礼拝堂群が建設されたのと同じ勢いで進められたと推測されるが、このサクロ・モンテ建造の最初期にはさらに、奇跡を起こすと信じられて信心用の小聖龕（ピローネ）に描かれていた古い壁画を収めるため、1660年から1667年までの間にマドンナ・デッレ・グラツィエ礼拝堂（オラトリオ）の建設作業も追加された。またカピスは、その礼拝堂に隣接させてロレートの聖家の模造建築を建てることを希望し、1674年から1694年までの間に具現させた。

さらに1667年には、同じトンマーズ・ラッザーロのプロジェクトによって、上り坂の中腹に最終的にカプチン派フランシス

コ会士の新しい修道院も着工された。この修道院には、修道会固有の教会堂と庭園や耕作地向けの広い空間があった。その総体は、後述する1772年の建築家ピエル・マリア・ペリーニによる銅版画中に最も発展した形で示されている。

彫刻

トンマーゾ・ラッザーロと並ぶ第1期前半のもう一人の主演は、ミラノ出身の彫刻家ディオニジ・ブッソラであった。彼はその塑像家、舞台美術家としての能力の高さゆえに、サクロ・モンテ群の美術家たちの間で17世紀後半に頭角を現した彫刻家である。彼は長期に亘ってミラノ大聖堂やバヴィーアのチェルトーザで制作に従事し、30年間は、このドモドッソラ他、ヴァラッロやオルタ、ヴァレーゼ、ガッリアーテのサクロ・モンテ群で制作に携わった。

ブッソラは、ドモドッソラ出身（但しクラヴェッジャの一族出身）の画家カルロ・メッレリオの推挙でカピスに招かれ、建造が始まったばかりの1661年頃ドモドッソラへ到着した。ブッソラは同じ1661年には、オルタの勝利門の上に聖フランチェスコ像を設置していた。ドモドッソラから注文された最初の仕事は、聖墳墓の横たわるキリスト像と十字架上のキリスト像で、両像はカピスと教会財産管理委員たちの気に入るところとなった。

司教の承認を得て、1662年に契約がさらに4年延長され、ブッソラは42体の塑像を制作することになった。1672年11月25日付けでミラノから出したカピス宛の手紙⁽³⁵⁾から推測されるように、彼はミラノの工房で粘土を成形、焼成し、焼成し終わっ

たものを輸送するつもりで準備していた。しかし1663年の夏に、他ならぬカピス自身が手配したドモドッソラの住居に家族ごと招かれた。ちなみに、その2年後には今度はオルタで同じように家族とともに一夏を過ごし、オルタのサクロ・モンテのために彫刻を制作したが、その時同地で彼にあてがわれたのは寝台4基と敷布、クッションなど⁽³⁶⁾であった。

ブッソラは、困難な仕事であったにも拘らず、ドモドッソラでは1661年から1681年までの間に、巡礼聖堂内の預言者像や第13堂「十字架降下」、第14堂「聖墳墓」、「十字架の幻視」の礼拝堂、第4堂「聖母との出会い」、ロレートの聖家の2体の受胎告知の群像（大天使像と聖母マリア像）、第15堂「復活」、第2堂「十字架を課されるイエス」などを、ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴォルピーノや息子たちを助手、共作者として完成させた。ちなみに第2堂の設営はカピスの没年（1681年）と同年に完了した。そしてブッソラは1681年には仕事を打ち切り、彫刻ではルズナーティが彼に取って代わる。

ブッソラが仕事を打ち切り、その6年後の1687年にミラノで没したことで、ドモドッソラの総体の第1期の設営は締め括られたが、巡礼者が早々に訪れたこともあって、司教ヴィスコンティはこの巡礼地を早くも1690年に公に祝別している。

ここで、ヴァラッロの聖母マリア被昇天聖堂内陣の天国の場面用にブッソラが制作した夥しい数の作品を除いて、彼が30年の軌跡の中で完成させた作品数をサクロ・モンテ別に比較してみれば、オルタでは

150体（1678年に息子の1人オッタヴィオが最後の支払いを受領）、ドモドッソラのカルヴァリオでは45体、ヴァレーゼでは50体、そしてガッリアーテの小ヴァラッロでは20体となる。従ってドモドッソラのサクロ・モンテは、彼がサクロ・モンテ群で展開した仕事を理解する上で、重要な場所の一つであると言える。

3.1.2 第1期後半

建築

第1期前半の主役たちが姿を消した後も、近隣のアローナの聖カルロのサクロ・モンテとは異なり、建造が中断されることはなかった。そして実際、1690年から1708年頃にかけて、第10堂「聖衣を剥奪され苦水を飲まされるイエス」と第15堂「復活」の2つの礼拝堂が建設された。この建造プロジェクトは、トンマーゾ・ラツザーロ親方と同様、ヴァル・ディンテルヴィ出身のアントニオとドメニコのペリーニ兄弟に帰される。

彫刻・絵画

また、堂内の装飾についても、18世紀の最初の10年間に、オルタでもまったく同じであったように、ディオニジ・ブッソラの後任となったミラノ出身のジュゼッペ・ルズナーティや画家ジョヴァンニ・サンピエトロが制作に当たった。ルズナーティは、まだ何もなかった第9堂「三度目の転倒」と第15堂、第10堂に彫刻を設置し、さらに十字架の幻視の礼拝堂の彫刻像にも関与した。彼は、1682年から1692年にかけてオルタに91体の像を設置していた間も、ほぼミラノの工房で成形してドモドッソラに95体もの像を送り込んだ。

また、第9堂では、ロマニャーノ出身の画家タルクイーニオ・グラッシが彫刻群に彩色を施した他、壁面全体に壁画を手掛けた。

3.2 第2期（1740年代～1800年頃）

建築

しかしルズナーティが1710年にドモドッソラから去ると、建設・設営は再び中断し、1732年に巡礼聖堂の内陣席、そして1735年に第2堂の前廊（1735年）といった単発的な発議があっただけであった。しかし1742年には幸いにも、第2章で見たように、最初の第1堂「ピラトの前のイエス」の建造資金が見出された。そして、翌1743年までにペリーニ兄弟（詳細は不詳）によって礼拝堂が建設され、不詳の作家による彫刻像が配されるとともに、1746年にはミラノ出身のカルロ・カネパによって壁画も施された。

また、1670年代からは再び建造、装飾が力強く再開される。それは、1768年から10年間、同様にヴァル・ディンテルヴィ出身の建築家で実業家でもあったピエル・マリア・ペリーニが建造に従事したからである。彼は疑いなく第7堂や第8堂、第11堂を建設し、おそらく第6堂の建設にも携わったと推測される⁽³⁷⁾。彼の建築群を分析すると、定型からは自由な、建築家としてかなり明瞭な個性が看取される。

ここで、1772年にペリーニが司祭マラーヴィの依頼で制作した版画に触れておけば、同版画に見られる眺望は同サクロ・モンテにとって重要な史料となっている。というのもそれは、当初のプランの翻案で

あると同時に、右下方の凡例から分かるように、当初の作業を補完する新プランであることを示しているからである。同版画には、1656年に1つの十字架が設置された場所と、第6堂「ヴェロニカ」や第7堂「二度目の転倒」に通じるコース沿いに、具現されなかった一つの礼拝堂を特定できる。また、その道は、マツアレツラ城に通じていた中世のルートではなく、新しいコースを辿るようになっており、ヴァレーゼで採用されたバロック的配列に倣って礼拝堂を風景的に美しい坂道の上に建てることを可能にさせるものであった。

彫刻

また、彫刻については、第11堂にヴァルセージア出身のジョヴァンニ・ルーカ・ライネーリが、また第8堂にコモのラッリオ出身の有能なステファノ・サルテリオが多数の群像を設置している。

絵画

さらに堂内の背景画については、第10堂でヴァルセージアのチェッリオ出身のフレスコ画家ロレンツォ・ペラチーノが2年間雇用され、1764年に壁画を完成した他、第11堂では、クザーノ出身のジュゼッペとジョヴァンニ・アントニオ、アントニオ・マリアのトリッチェッラ兄弟が壁画を手掛けた。

3.3 第3期（多難な時代後の1830年代～1880年頃）

18世紀末のナポレオン時代に始まるドモドッソラのサクロ・モンテの変遷は、他のすべてのサクロ・モンテと同様に痛ましい。1810年には宗教教団の廃止によって

カプチン会神父たちが追放され、修道院は兵舎となり、今日では廃屋状態になっている。さらに第1堂は軍の国有地として没収され、爆破によって破壊された。そして18世紀末には、このサクロ・モンテの資金は、壊滅的な破壊に遭っていた教区教会を再建するため、司教が自由にできるよう変更された。

しかし約30年間の放置の後、この山の状況は改善される。1828年に、ミラノの副知事にしてウィーンにおけるヴェネト・ロンバルドの大書記官（Gran Cancelliere）でもあったドモドッソラの伯爵ジャコモ・メツレリオが、若き司祭アントニオ・ロズミーニに、彼が創設を望んでいた「愛徳会」（Istituto della Carità）とロズミーニ教団の創設地として、ドモドッソラのマツアレツラの丘を選ぶよう勧めたからである。現在、哲学者、またリソルジメントの傑出した活動家としても知られるロズミーニは、親交のあったアレッサンドロ・マンゾーニを介して、メツレリオ伯爵とは既知の間柄であった。その後ロズミーニは、ドモドッソラの城の廃墟近くに上り、放置状態にあった巡礼聖堂と崩れかけた司教座聖堂参事会員の家、聖職者の霊的修練の家（ナポレオンの法令の布告以前に定期的に集まっていたオッソラの司祭たち用の20室ほどの家）を目にしたが、失望することなく、同所の剥き出しの岩上の3つの小部屋に住んで仕事にとりかかった。そして1833年に、ノヴァーラ司教であるモロッツォ枢機卿から正式にサクロ・モンテの総体を委ねられた。その後、ロズミーニ会士たちは、聖堂参事会が管理する教会群を抑

圧した1855年5月29日の法律による二度目の深刻な危機を乗り越え、1857年2月30日、遂にこの聖なる総体全体を獲得し、ドモドッソラにおける彼らの存在を確たるものにした。こうしてカルヴァリオに捧げられたサクロ・モンテは、再び活気を取り戻して、信仰と黙想の場としての独自の威厳を回復し、修練院並びに司祭や一般信徒の霊的センターを擁する現在の総体へと発展を遂げていく。

なお、同じメッレリオ伯爵は、建築家ジャン・ルーカ・カヴァッツィ・デッラ・ソマーリアの設計によって私費で第5堂も建造(1835-37年)し、1848年に画家ハルトマンを呼んで堂内の壁面に絵を描かせたが、ロズミーニ会神父たちとカピスの子孫たちの間に生じたサクロ・モンテの所有権をめぐる訴訟に嫌気がさし、それを未完のままにした。

その他、この時期には、第6堂の壁面にカノッピオ出身の画家パオロ・ライネーリによってイエスとヴェロニカの出会いのミステーロが描かれた。さらに第14堂の聖墳墓の壁面にも、1877年から1882年までの間にフェリーチェ・パリエッティが装飾を施した。

なお一方で1877年には、ピラトのアーチがオッソラの自治体によって取り壊された。

3.4 第4期(1900年代から1950年代の完成)

そうこうする内に、爆破で失われた第1堂を同じ場所に再建する提案がなされ、1900年から1909年までの間に具現され、

ピエトロ・モスカによる彫刻像も配され、壁面も不詳の画家によって装飾された。それは第1堂が十字架の道行きの第1留に当たると同時に、第2堂(=第2留)の存在を守るのに役立つからでもあった。続いて、この山の250周年記念時(1907年)に、トリノ出身の技師ステファノ・モリによって、十字架が関連する留を表していた場所に第3堂「最初の転倒」も着工され、この建造作業の完了をもって十字架の道行きの行程は最終的に確定された。なお、第1堂の設計者は不詳であるが、この時期に第3堂でサクロ・モンテに関わった唯一人の技師、モリの可能性が高いように思われる。また、第3堂の背景も1947年にロズミーニ会のサヴァッリオ教授の意匠によって装飾された。

カルヴァリオを完成させるという粘り強い熱意は、さらに1950年代まで続き、工芸的な木彫像が第7堂に1940年、第3堂に1947年、第5堂と第6堂に1957年に配された。ちなみに最後の設営時期は、創設300年祭に当たっていた。

さらに20世紀の間に、モニュメンタルなピラトのアーチが建っていたベアタ・ヴェルジネ・デッラ・ネーヴェ聖堂の隣に、500人もの学生を収容できるロズミーニ会の寄宿学校の総体の建設作業が進められていたことも付記しておく。

1991年、このドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオは、ピエモンテ州の発議によって特別自然保護区となった。

結語

以上、2章と3章においてドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオ建造の発議、着工から完成に至るまでの経緯や経過を、構成している主要な建造物とそれらの装飾、並びに従事した芸術家に関する表を作成しながら概観した。そして2章では約300年に亘った完成までの期間は大きく四期に分けて考察、展開可能であることを明らかにした。また、3章における四期それぞれの建造や装飾の状況の時系列での概観により、ドモドッソラでは幸いにも当初の構想が中断されることはなかったものの、主要な建設とその装飾は1656年～1710年頃までの間、つまり第1期に成し遂げられていたと結論できるように思われる。そしてその第1期に活躍した主要な芸術家は、建築ではヴァル・ディンテルヴィ（現在のコモ県）のトンマーゾ・ラッザーロであり、彫刻では他のサクロ・モンテでも活躍していたミラノ出身の彫刻家ディオニジ・ブッソラであった。壁画装飾は、約30年遅れる形で、ミラノの画家ジョヴァンニ・サンピエトロが1699年に第13堂に関わるまでは一切施されていないのも興味深いと言える。また、この時期の芸術家たちの様式がいわゆるバロック様式を反映していることは言うまでもない。

さらに四期の各時期に従事した芸術家たちの出身地、芸術家としての生育地に着目すれば、建築では第1期、第2期は圧倒的にヴァル・ディンテルヴィ（コモ県）であると結論づけられる。彫刻家や画家は第1期ではミラノとメリデ（スイスのティチー

ノ州）、ロマニャーノであるが、第2期以降は、彫刻家はヴァラッロのサクロ・モンテのあるヴァルセージアやラーリオ（コモ県）となり、画家もチェッリオ（ヴェルチェッリ県）やクザーノ（ミラノ県）、ロマニャーノ（ノヴァーラ県）となって多様性を帯びてくると言える。また、第3期には、建築はソマーリア（ローディ県）、彫刻家は活動せず、画家はキアベンナ（ソンドリオ県）、カノッピオ（スイスのティチーノ州）などとなり、より広域に亘ってきたことが分かった。そして20世紀の第4期に入ると、建築ではトリノ、彫刻ではビエッラ、オルティゼーイ（ボルツァーノ県）、絵画ではアメーノ（ノヴァーラ県）などとなり、彫刻はもはや北西イタリアで調達されなくなったことが分かる。また、この第4期の特徴として、ベッルータやフランチェスコ（チーノ）・ボッツエッティのような職業養成校や美術研究所の教員であった彫刻家や画家が制作に携わったことを挙げる事ができよう。

【註】

- (1) ドモドッソラ市の公式サイト“Città di Domodossola”中の“Cenni storici” (<http://www.comune.domodossola.vb.it>) 参照
- (2) イタリアのコムーネや県、州の有用な情報サイト“Tuttitalia.it”の2021年の人口動態調査結果による。ドモドッソラは県内で2番目の人口を擁する。
- (3) Tullio Bertamini, “Il Sacro Monte Calvario di Domodossola”, Verbania, 1980, estratto da 《Oscellana》, Anno 10, n. 2, Aprile-Giugno, 1980, 64 pagine in totale.

- (4) Beatrice Bolandrini, *Dionigi Bussola 1612-1687: "Moderno Annibale Fontana in questi nostri tempi"*, Tesi di Dottorato, Dottorato di Ricerca in Studi Umanistici. Discipline Filosofiche, Storiche e dei Beni Culturali, Ciclo XXVI, Dipartimento di Lettere e Filosofia, Università degli Studi di Trento, Anno Accademico 2012/2013, pp. 241-317.
- (5) 拙著『サクロ・モンテの起源 西欧におけるエルサレム模造の展開』勉誠出版 2017年 281-282頁
- (6) 「十字架の道行き」については、拙訳、アメデ・テータールト・ドゥ・ゼデルヘム著、関根浩子訳『キリストの受難 十字架の道行き 心的巡礼による信仰の展開』勉誠出版 2016年を参照されたい。また、サクロ・モンテと聖地パレスティナ、フランシスコ会との関係については、拙著『前掲書』第2章から第4章まで、第5章2-3-2節、Tullio Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario di Domodossola*, 2000, Ornavasso, pp. 10-11を参照。
- (7) マッタレッラの丘や城については、Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... ibid.*, pp. 12-15.; Angelo Marzi, "IL SACRO MONTE DI DOMODOSSOLA", in Aa. Vv., *SACRI MONTI in Piemonte, Itinerari nelle aree protette di BELMONTE CREA DOMODOSSOLA GHIFFA ORTA VARALLO*, Torino, 1994, p. 78 e p. 87ほか。
- (8) Marzi, *SACRI MONTI in Piemonte, ...*, p. 75では、1627年とあるが、1658年の誤記と思われる。Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... op. cit.*, pp. 21-23に掲げられている1658年9月28日付けの司教G. M. オデスカルキの布告の抜粋の末尾には、植栽や樹木の配列などに関する注意が書かれている。
- (9) *Calvario Monte Sacro di Domodossola*, a cura di Simonetta Minissale e Alessandro Feltre, 2009, Torino, p. 54では1900年、Marzi, "SACRI MONTI in Piemonte, ...", p. 76では20世紀初めとある。
- (10) *Calvario Monte Sacro... ibid.*, p. 56ではカルロ・ラッザーロ、Marzi, *SACRI MONTI in Piemonte, ...*, p. 76やBolandrini, *op. cit.*, p. 244、その他の文献ではトンマーズ・ラッザーロとある。
- (11) *Calvario Monte Sacro... ibid.*, p. 56では息子のチェーザレ、また、Tullio Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario di Domodossola*, 2000, Ornavasso, p. 33でも息子のチェーザレ、同じ本のp. 52ではヴォルピーノとされ、混乱がみられる。
- (12) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... op. cit.*, p. 26は13人とし、Bolandrini, *op. cit.*, p. 305は12人としている。
- (13) Bolandrini, *op. cit.*, p. 274によれば、当初は18体であったと考えられる。
- (14) Elena De Filippis, "L'attività di Dionigi Bussola al Sacro Monte di Varallo", in Aa. Vv., *Un artista del Seicento tra Piemonte e Lombardia. L'opera dello scultore Dionigi Bussola nei Sacri Monte*, Atti del convegno, Gravelona Toce, 2004, p. 40は、ヴォルピーノをほぼ義弟として、ブッソラに匹敵する実績を挙げた彫刻家として記録されていることを紹介。
- (15) *Ibid.*, p. 33に掲載されているブッソラのカピス宛書簡の書き起こし参照。
- (16) Marzi, "IL SACRO MONTE...", *op. cit.*,

- p. 80 では「依然として不詳の建築家」とされている。
- (17) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario ... op. cit.*, 2000, p. 65. 他方、Marzi, *Ibid.*, p. 80 は1772年より少し後としている。
- (18) Marzi, *op. cit.*, p. 80. ; *Calvario Monte Sacro ... op. cit.*, p. 66.
- (19) *Calvario Monte Sacro... ibid.*, p. 66.
- (20) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario ... op. cit.*, p. 65.
- (21) Marzi, *op. cit.*, p. 81.
- (22) Marzi, *op. cit.*, p. 82. これに対し、Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario ... op. cit.*, p. 71 はP. M. ベリーニ設計としている。
- (23) *Calvario Monte Sacro... op. cit.*, p.74.
- (24) Bolandrini, *op. cit.*, p. 291によれば、2012年の分析時に18世紀の彩色の痕跡が見出されたという。
- (25) ヴォルピーノに関する言及は、*Calvario Monte Sacro...op. cit.*, p. 76に初出。
- (26) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario ... op. cit.*, p. 78では、ストウッコの作者はヴァルセージアの彫塑家カルロ・ジョヴァンネッティとジョヴァンニ・ジョヴァンネッティで、1703年の制作とされている。
- (27) *Calvario Monte Sacro... op. cit.*, p. 77.
- (28) *Calvario Monte Sacro... op. cit.* は、p. 82の「十字架の幻視」の礼拝堂の解説中では制作者をD. ブッソラとG. B. ヴォルピーノとし、p. 80の第15堂の解説中ではD. ブッソラとチェーザレ・ブッソラとし、しかも制作年を1680-83年としており、矛盾した記載がみられる。一方Bolandrini, *op. cit.*, p. 315は同堂の作品はいずれもブッソラの作品ではないとする。
- (29) 十字架の道行きの14留の確定については、アメデ著、関根訳『キリストの受難 前掲書』109-127頁参照。
- (30) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario ... op. cit.*, p. 85では、ルズナーティのテラコッタ像は9体、制作・設置年は1704年とされている。
- (31) Bolandrini, *op. cit.*, p. 315は小姓像をブッソラの作ではないと考察。
- (32) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... op. cit.*, p. 6. ; Marzi, “IL SACRO MONTE DI DOMODOSSOLA”, in *op. cit.*, p. 67.; また、2021年のサクリ・モンティ管理運営協会 (Ente di Gestione dei Sacri Monti) の公式ホームページでも、1690年頃までの建造物をトンマーズ・ラッザーロに帰して紹介 (<http://www.parks.it/riserva.monte.domodossola/par.php> ; <http://www.sacrimonti.org/i-modelli-architettonici-ii>)。
- (33) Francesco Ferrari, “Giovanni Matteo Capis e Dionigi Bussola al Monte Calvario di Domodossola”, in Aa. Vv., *Un artista del Seicento tra Piemonte Lombardia. L'opera dello scultore Dionigi Bussola nei Sacri Monti*, 2004, Gravellona Toce, p. 22によれば、アンティゴリー谷やヴィジェツォ谷、ディヴェドロ谷といった近隣の谷の集落からも建設資金が寄進されたことを、カピスが1659年9月14日に自身の冊子に記しているという。
- (34) Massimo Centini, “Domodossola: Un Monte Calvario volute da due cappuccini”, in *I Sacri Monti dell'arco alpino italiano, dal mito dell'altura alle ricostruzioni della Terra Santa*

nella cultura controriformista, Ivrea (Torino), 1990, p.97 e nota 3.; Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... op. cit.*, p. 22 掲載のオデスカルキの布告文参照。

- (35) Bertamini, *Il Sacro Monte Calvario... op. cit.*, p. 33 に掲載された書簡内容参照。
- (36) Angelo Marzi, “Il Bussola”, in *Orta San Giulio La Fabbrica del Sacro Monte Conoscenza Progetto Restauro*, a cura di A. Marzi, Mappano- Torino, 1991, p. 124.
- (37) Marzi, “IL SACRO MONTE DI DOMODOSSOLA”, in *op. cit.*, p. 72 は、ペリーニが建造した確実な礼拝堂を第8、第9堂としている他、磔刑の礼拝堂を第12堂ではなく第11堂をペリーニの仕事であるかのような記載をしており、混乱が見られる。

【その他の参考文献】

- ・ Angelo Marzi, *Guida al Sacro Monte di Domodossola*, Torino, 1995, estratto da *SACRI MONTI in Piemonte, Itinerari nelle aree protette di BELMONTE CREA DOMODOSSOLA GHIFFA ORTA VARALLO*, a cura di Enrico Massone 1994, Torino.
- ・ G. F. Piccaluga, “BUSSOLA, Cesare”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 15, 1972.
- ・ G. P. Chiorino, “Pietro Mosca”, da *Rivista Biellese*, aprile 1999 anno 3-n° 2, BieBi Editrice, Biella.
- ・ C. Debiaggi, “GRASSI, Tarquinio”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 58, 2002.
- ・ M. Mander, MAESTRI, “Giovan Battista, detto

il Volpino”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 67, 2006.

- ・ “Lorenzo Peracino, il “pictor singularis””, tratto da *Lorenzo Peracino* della dr.ssa Sara Brustio, <http://www.prolocovallecellio.com/>(copyright 2011 Proloco Valle Cellio)
- ・ A. Casati, “RUSNATI, Giuseppe”, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. 89, 2017.

【図版出典】

図1 : Aa. Vv., *SACRI MONTI in Piemonte, Itinerari nelle aree protette di BELMONTE CREA DOMODOSSOLA GHIFFA ORTA VARALLO*, a cura di Enrico Massone, Torino, 1994, p. 69の図面を稿者加工

図2, 4~15, 17, 18 : 稿者撮影

図3, 16 : *Calvario Monte Sacro di Domodossola*, a cura di Simonetta Minissale e Alessandro Feltre, 2009, Torino.

【付記・謝辞】

本稿はJSPS 科研費18K00177 (研究代表)の助成を受けて行った研究成果の一部である。2010年8月に実施した現地再訪時にロレートの聖家やサンタ・マリア・デッレ・グラツイエ礼拝堂内への入堂を許可下さったロズミーニ会にこの場を拝借して感謝の意を表したい。

表 1

礼拝堂		ドモドッソラのサクロ・モンテの建造・礼拝堂装飾に携わった建築家・芸術家とその時期																		
		1651~1700年	1701~1750年	1751~1800年	1801~1850年	1851~1900年	1901~1950年	1951~2000年	凡例：■作家の活動時期 ■推測される制作時期											
主題	分類	作家名	建造・制作時期																	
1	ピラトの前のイエス	ペリーニ兄弟(いづれの兄弟か?)	1742-43年 (1830年破壊)	■																
	彫刻(当初)	不詳	18世紀前半?		■															
	壁画(当初)	カルロ・カナバ	1746年		■															
2	十字架を課されるイエス	不詳(ステファノ・モリ?)	1900-09年																	
	彫刻(再建後)	ピエトロ・モスカ	1909年																	
	壁画(再建後)	不詳	20世紀初め?																	
3	最初の転倒	トンマーゾ・ラッツァーロ	1666~70年代初め	■																
	彫刻	ディオニジ・ブッゾラ、 チエーザレ・ブッゾラ	1677-81年	■																
	彫刻像彩色	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1703年																	
4	聖母との出会い	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1703年																	
	壁画	ステファノ・モリ	1907-08年																	
	彫刻(木彫)	パルルータ	1947年																	
5	キレネのシモン	ジョルジョ・サヴァリオリ	1947年																	
	壁画・煉瓦積み	トンマーゾ・ラッツァーロ?	1661-64年																	
	建築	ディオニジ・ブッゾラ、 G.B.ヴォルピエーノ	1664年																	
6	最初の転倒	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1703-04年																	
	壁画	ジャン・ルーカ・カヴァッツィ、 テッラ・ソマリア	1835-37年																	
	建築(設計)	ヴィンチェンツォ・デ・メッツ、 ディ・オルティゼーネイ社	1957年																	
7	キレネのシモン	ルイジ・ハルトマン	1848年																	
	彫刻(木彫)																			
	壁画																			

礼拝堂	主題	分類	作家名	建造・制作時期	年											
					1651~1700年	1701~1750年	1751~1800年	1801~1850年	1851~1900年	1901~1950年	1951~2000年					
6	ヴェロニカ	建築	ピエル・マリア・ペリーニ?	1770年より少し前												
		彫刻(木彫)	ヴィンチェンツォ・デ・メッツ・ディ・オルティゼイ社	1957年												
7	二度目の転倒	壁画	パオロ・ライネーリ	1854年 (1957年除去)												
		建築	ピエル・マリア・ペリーニ	1770年より少し前												
8	敬虔な婦人たちとの出会い	彫刻(木彫)	ペッルータ	1940年												
		油彩画、装飾	アントニオ・リナルディ	19世紀の最後の10年間												
9	三度目の転倒	建築	ピエル・マリア・ペリーニ	1773-78年												
		彫刻	ステファノ・サルテリオ	1782年												
10	聖衣を剥奪され 苦水を飲まされるイエス	壁画	トッリチェッラ兄弟(ジュゼッペとジョヴァンニ・アントニオ)	1779-80年												
		建築	トンマージョ・ラッツァーロ	1664-66年												
11	十字架につける	彫刻	ジェゼッペ・ルズナーティ	1708年												
		壁画	タルクイーニオ・グラッシ	1710年												
10	聖衣を剥奪され 苦水を飲まされるイエス	建築	ペリーニ兄弟(アントニオとドメニコ)	18世紀初め												
		彫刻	ジェゼッペ・ルズナーティ	18世紀の最初の10年												
11	十字架につける	彫刻像彩色	ロレンツォ・ペラチャーノ	1764年												
		壁画	ロレンツォ・ペラチャーノ	1764年												
11	十字架につける	建築	ピエル・マリア・ペリーニ	1768年以降												
		彫刻	ジョヴァンニ・ルーカ・ライネーリ	1776年												
11	十字架につける	彫刻像彩色	アントニオ・マリア・トッリチェッラ	1780年												
		壁画(室内)	トッリチェッラ兄弟(ジュゼッペ、ジョヴァンニ・アントニオ、アントニオ・マリア)	1780年												

礼拝堂	主題	分類	作家名	建造・制作時期	年代								
					1651~1700年	1701~1750年	1751~1800年	1801~1850年	1851~1900年	1901~1950年	1951~2000年		
12	磔刑	巡礼聖堂	トンマーズ・ラッザーロ	1657年	■								
		彫刻	ディオニジ・ブッソラ、 G.B.ヴォルピーノ	1662-63年	■								
		彫刻像彩色	G.B.ヴォルピーノ	1662-63年									
		ストゥッコ	アントニオ・ロンカーティ	1693年	■								
13	十字架降下	絵画(背景)	フランチェスコ(チーノ)・ ポッツエッティ	1921年						■			
		巡礼聖堂	トンマーズ・ラッザーロ	1657年	■								
		彫刻	ディオニジ・ブッソラ、 G.B.ヴォルピーノ	1663-64年	■								
		彫刻像彩色	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1699年	■								
聖堂内	十字架の幻想の 礼拝堂	壁画	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1699年									
		巡礼聖堂	トンマーズ・ラッザーロ	1657年	■								
		彫刻	ディオニジ・ブッソラ？、 G.B.ヴォルピーノ？	1663-64年？	■								
		壁画	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1703年		■							
聖堂内	付柱の張り出し上 クーポラ	預言者像	ディオニジ・ブッソラ、 G.B.ヴォルピーノ	1670年	■								
		復活のキリスト像	ディオニジ・ブッソラ、 G.B.ヴォルピーノ、サンディーノ	1670年	■								
		巡礼聖堂外	トンマーズ・ラッザーロ	1657年	■								
		彫刻	ディオニジ・ブッソラ	1661、1663年	■								
14	聖墳墓	彫刻像彩色	G.B.ヴォルピーノ	1662-63年？									
		壁画	フェリーチェ・パリエッティ	1877-82年							■		
15	復活	建築	ペリーニ兄弟(アントニオと ドメニコ)	1690-1708年									
		彫刻	ジェゼップ・バルズナーティ	1704年									
		彫刻(十字架の 幻想用の2体)	ディオニジ・ブッソラ	1680-83年									
		彫刻像彩色	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1706年									
		壁画	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1706年									

礼拝堂	主題	分類	作家名	建造・制作時期	年代											
					1651～1700年	1701～1750年	1751～1800年	1801～1850年	1851～1900年	1901～1950年	1951～2000年					
その他	ロレートの聖家	建築	トンマーズ・ラッザーロ	1674-94年	■											
		彫刻(受胎告知)	ディオニジ・ブッソラ	1677年	■											
		彫刻(像彩色)	ジョヴァンニ・サンピエトロ	1702年		■										
		彫刻(黒マリア)	不詳	不詳												

表2

凡例 I-L (イタリア・ロンバルディア州)、I-P (イタリア・ピエモンテ州)、S-T (スイス・ティチーノ州)、I-T=A (イタリア・トレンティーノ=アルト・アディジェ州)

ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオにおける主要な建築家・彫刻家・画家の活動時期										
分野	出身地	現在の国・州区分	第1期		第2期		第3期		第4期	
			1651～1700	1701～1750	1751～1800	1801～1850	1851～1900	1901～1950	1950～2000	
建築家	コモ	I-L	■	■	■					
	ヴァルディンテルヴィ	I-L		■	■					
	ヴァルディンテルヴィ?	I-L			■					
	ヴァルディンテルヴィ	I-L			■					
	ソマリア(ローディ県)	I-L				■				
	トリノ	I-P							■	
彫刻家	ミラノ	I-L	■	■	■					
	ミラノ	I-L	■	■	■					
	不詳	不詳	■	■	■					
	メリデ	S-T		■	■					
	ガッラルアテ	I-L		■	■					
	ヴァルセージア	I-P			■					
	コモ	I-L			■					
	ビエッラ	I-P							■	
	ミラノ?	I-L?							■	
	オルティゼーイ(BO)	I-T=A							■	■
画家(彫刻彩色含む)	ミラノ	I-L	■	■	■					
	ロマンチャーノ	I-P		■	■					
	ミラノ	I-L		■	■					
	チェッリオ	I-P			■					
	クザーノ	I-L			■					
	キアヴェンナ	I-L							■	
	カノッピオ	S-T						■		
	不詳	不詳						■		
	ノヴァーラ	I-L							■	
	アレッサンドリアで成育	I-P							■	
	不詳	不詳							■	■
									■	■
									■	■

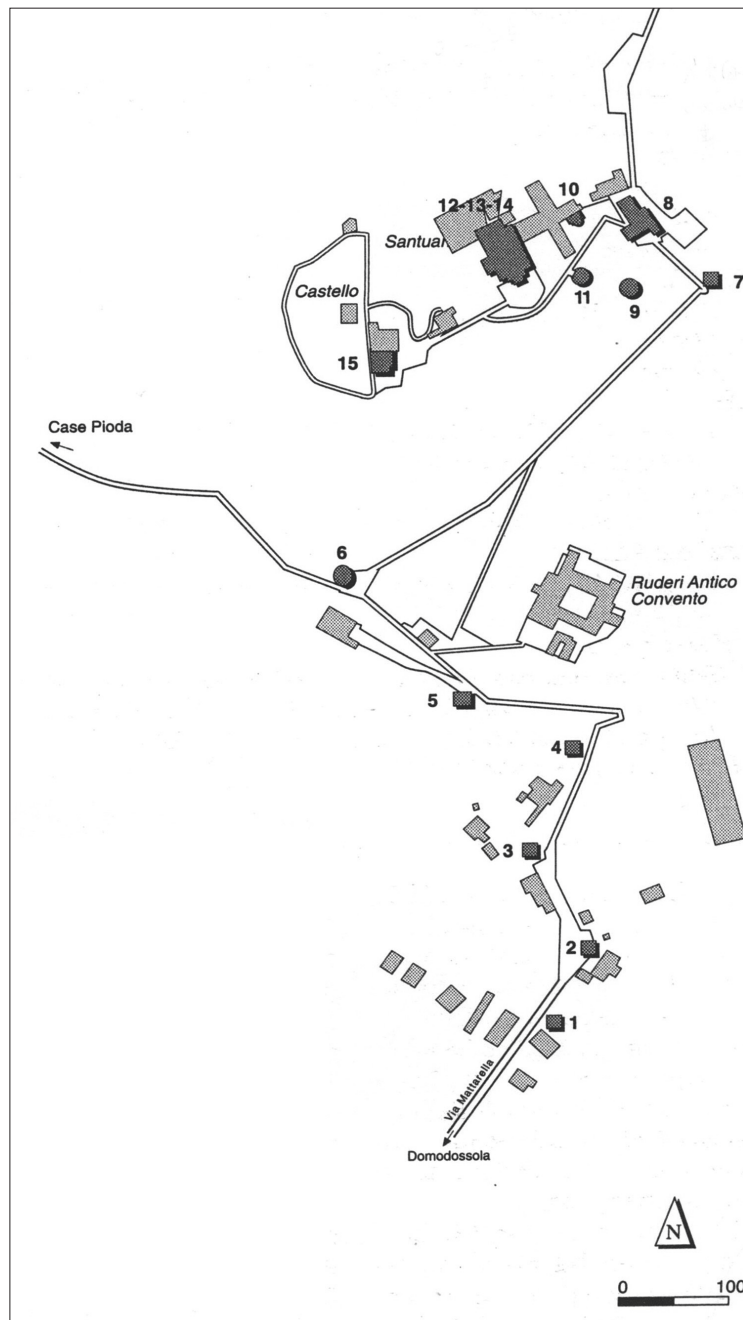


図1 ドモドッソラのサクロ・モンテ・カルヴァリオの礼拝堂配列図

(Aa. Vv., *SACRI MONTI in Piemonte, Itinerari nelle aree protette di BELMONTE CREA DOMODOSSOLA GHIFFA ORTA VARALLO*, a cura di Enrico Massone, Torino, 1994, p. 69 図面)

- 第1堂：ピラトの前のイエス　第2堂：十字架を課されるイエス　第3堂：最初の転倒
 第4堂：聖母との出会い　第5堂：キレネのシモン　第6堂：ヴェロニカ
 第7堂：二度目の転倒　第8堂：敬虔な婦人たちとの出会い　第9堂：三度目の転倒
 第10堂：聖衣を剥奪され苦水を飲まされるイエス　第11堂：十字架につける
 第12堂：磔刑　第13堂：十字架降下　第14堂：聖墳墓　第15堂：復活



図2 第1堂 ピラトの前のイエス
彫刻：ピエトロ・モスカ 1909年
壁画：不詳

図3 第2堂 十字架を課されるイエス
彫刻：ディオニジ・ブッソラ、
チェーザレ・ブッソラ
彫刻像彩色：ジョヴァンニ・サンピエトロ
1703年
壁画：ジョヴァンニ・サンピエトロ 1703年



図4 第3堂 最初の転倒
彫刻：ベッルータ 1947年
壁画・煉瓦積み：ジョルジョ・サヴァッリオ
1947年



図5 第4堂 聖母との出会い
彫刻：ディオニジ・ブッソラ、
G.B. ヴォルピーノ 1664年
壁画：ジョヴァンニ・サンピエトロ
1703-04年



図6 第5堂 キレネのシモン
彫刻：ヴィンチェンツォ・デーメッツ・
ディ・オルティゼーイ社 1957年
壁画：ルイジ・ハルトマン 1848年



図7 第6堂 ヴェロニカ
彫刻：ヴィンチェンツォ・デーメッツ・
ディ・オルティゼーイ社 1957年
壁画：パオロ・ライネーリ 1854年
(1957年除去)



図8 第7堂 二度目の転倒
彫刻：ベッルータ 1940年
壁画・煉瓦積み：アントニオ・リナルディ
19世紀の最後の10年間



図9 第8堂 敬虔な婦人たちとの出会い
彫刻：ステファノ・サルテリオ 1782年
壁画：トリチェッラ兄弟（ジュゼッペと
ジョヴァンニ・アントニオ）
1779-80年



図10 第9堂 三度目の転倒
彫刻：ジェゼッペ・ルズナーティ 1708年
壁画：タルクイーニオ・グラッシ 1800年



図11 第10堂 聖衣を剥奪され苦水を飲
まされるイエス
彫刻：ジェゼッペ・ルズナーティ 18世
紀の最初の10年
彫刻像彩色：ロレンツォ・ペラチーノ
1764年
壁画：ロレンツォ・ペラチーノ 1764年



図12 第11堂 十字架につける
彫刻：ジョヴァンニ・ルーカ・ライネーリ
1776年
彫刻像彩色：アントニオ・マリア・トッリ
チェッラ 1780年
壁画：トッリチェッラ兄弟（ジュゼッペ、
ジョヴァンニ・アントニオ、アント
ニオ・マリア） 1780年



図13 第12堂 磔刑
彫刻：ディオニジ・ブッソラ、
G.B. ヴォルピーノ 1662-63年
ストゥッコ：アントニオ・ロンカーティ
1693年
背景画：フランチェスコ（チーノ）・ボッ
ツェッティ 1921年



図14 第13堂 十字架降下
 彫刻：ディオニジ・ブッソラ、
 G.B. ヴォルピーノ 1663-64年
 彫刻像彩色：ジョヴァンニ・サンピエトロ
 1699年
 壁画：ジョヴァンニ・サンピエトロ
 1699年



図15 十字架の幻視の礼拝堂
 彫刻：ディオニジ・ブッソラ？、
 G.B. ヴォルピーノ？ 1663-64年？
 壁画：ジョヴァンニ・サンピエトロ
 1703年



図17 第15堂 復活
 彫刻：ジェゼッペ・ルズ
 ナーティ 1704年
 彫刻像彩色：
 ジョヴァンニ・サン
 ピエトロ 1706年
 十字架の幻視用の2体：
 ディオニジ・ブッ
 ソラ 1680-83年
 壁画：ジョヴァンニ・サン
 ピエトロ 1706年



図16 第14堂 聖墳墓
 彫刻：ディオニジ・ブッソラ 1661、1663年
 彫刻像彩色：G.B. ヴォルピーノ 1662-63年？
 壁画：フェリーチェ・パリエッティ
 1877-82年

図18 ロレートの聖家
 彫刻：ディオニジ・ブッソラ 1677年
 彫刻像彩色：ジョヴァンニ・サンピエトロ
 1702年

